

## 頭頸部悪性腫瘍に対する PET-CT の使用経験

古屋 出、中谷寛之、原 康文、西平宗功、宮形 養、星 秀樹、杉山芳樹

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座  
020-8505 岩手県盛岡市中央通一丁目 3-27

### 1 緒言

当科では頭頸部悪性腫瘍に対し PET 検査を行っており、その有用性について報告してきた<sup>1)~5)</sup>。

これまでの PET 検査は装置の性質上、撮影範囲が頭頸部領域に限られていたが今回、全身を撮影可能な PET-CT を使用したので、その概要を報告した。

### 2 平成 19 年度の症例

#### 2.1 症例の概要

平成 19 年度（平成 19 年 4 月 1 日から平成 20 年 3 月 31 日まで）に岩手医科大学附属病院歯科医療センター口腔外科第二診療室にて PET-CT 検査を行った症例を表 1 に示す。症例数は 14 例で、年齢は 32 歳から 82 歳、平均 64.1 歳であった。性別は男性 11 例、女性 3 例、部位は上顎歯肉が 4 例、下顎歯肉、舌、口底部がそれぞれ 3 例、上顎洞が 1 例であった。病理診断は扁平上皮癌が 11 例で最も多く、粘表皮癌、腺様嚢胞癌、悪性黒色腫がそれぞれ 1 例であった。

	年齢	性別	臨床診断	病理診断	頸部リンパ節転移	治療
1	70	女	口底癌	扁平上皮癌	なし	S
2	32	男	下顎歯肉癌	粘表皮癌	なし	S
3	56	男	口底癌	扁平上皮癌	なし	S
4	60	女	下顎歯肉癌	扁平上皮癌	なし	C
5	72	男	上顎歯肉癌	腺様嚢胞癌	なし	S
6	80	男	上顎歯肉癌	扁平上皮癌	なし	S
7	71	男	舌癌	扁平上皮癌	あり	C+R
8	65	女	舌癌	扁平上皮癌	あり	C+R+S
9	82	男	頬粘膜癌	扁平上皮癌	なし	R+S
10	81	男	上顎洞癌	扁平上皮癌	あり	C+R+S
11	59	男	舌癌	扁平上皮癌	あり	C
12	56	男	口底癌	扁平上皮癌	なし	S
13	39	男	上顎歯肉癌	悪性黒色腫	なし	C
14	75	男	上顎歯肉癌	扁平上皮癌	あり	S

C: 化学療法  
R: 外科療法  
S: 外科療法

表 1. 平成 19 年度の症例

## 2.2 腹部への転移が疑われた1例

症 例：81歳、男性

主 訴：左側頰部の腫脹が気になる

現病歴：2004年、近医歯科にて上顎左側大白歯を抜歯、義歯を作製し良好に経過していた。

2006年9月、左側頰部、上顎歯肉の腫脹を家族に指摘され同歯科受診し、義歯調整、および抗菌薬投与にて経過観察が行われたが、腫脹が消退しないため当科紹介、初診となる。

経 過：10月12日、CT施行したところ左側上顎部悪性腫瘍が疑われたため10月19日、当科入院となる。

10月24日、生検を行ったところ扁平上皮癌の病理診断を得たため、放射線併用化学療法を行い12月8日、全麻下に左側上顎洞開洞術施行した。

術後も放射線併用化学療法、および経過観察を行い2007年1月19日、CT施行したところ左側顎下リンパ節に転移が疑われたため1月31日から2月9日まで顎下部に放射線照射し、2月16日、全麻下に頸部郭清術施行した。

3月15日経過良好にて当科退院となった。

以後、当科外来通院下に経過観察中で2007年12月20日にCT、12月28日にMRIを施行したところ、右側頰部に腫大したリンパ節を認めた。1月9日に頰部US施行したところ、積極的に転移を疑う所見ではなかった。2月19日にPET-CTを施行したところ、図1示すとおり右側腹部に<sup>18</sup>F<sup>18</sup>FDGの集積を認めSUV値は3.58と高値を示した。そのため腹部への転移を疑い、2008年3月18日、腹部CT施行したところ、両側腎嚢胞の所見であった。

現在、再発、転移は認めず経過良好で、引き続き経過観察を行う予定である。



図1  
右側腹部に<sup>18</sup>F<sup>18</sup>FDGの集積を認める。

## 3 まとめ

悪性腫瘍における転移の有無は予後の大きく影響し、特に遠隔転移をきたした場合は著しく予後不良となる。

全身を撮影可能なPET-CTは局所の再発、転移だけでなく、遠隔臓器への転移の有無も検索可能なため患者の予後向上に寄与するものと思われる。

今後も症例を重ね、PET-CTの有用性などについて検討を進める予定である。

## 参考文献

- 1) 星秀樹, 関山三郎, 他 : 口腔癌に対する放射線併用動注化学療法の治療効果 NMCC 共同利用研究成果報文集 9 : 42-44, 2001
- 2) 星秀樹, 中谷寛之, 他 :  $^{18}\text{F}$ FDG-PET による口腔癌に対する放射線併用動注化学療法の治療効果判定 NMCC 共同利用研究成果報文集 10 : 38-44, 2002
- 3) 星秀樹, 中谷寛之, 他 : 口腔癌に対する動注,放射線同時併用法の治療効果判定 NMCC 共同利用研究成果報文集 11 : 43-47, 2003
- 4) 星秀樹, 中谷寛之, 他 : 口腔癌に対する動注,放射線同時併用法の治療効果判定 NMCC 共同利用研究成果報文集 12 : 10-12, 2004
- 5) 中谷寛之, 星秀樹, 他 : 頭頸部悪性腫瘍に対する放射線併用動注動注化学療法の治療効果判定 NMCC 共同利用研究成果報文集 13 : 5-8, 2005

## **Experience of using PET-CT for head and neck cancer**

I. Furuya, H. Nakatani, Y. Hara, S. Nishihira, Y. Miyagata, H. Hoshi and Y. Sugiyama

Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University  
1-3-27 Chuodori, Morioka, Iwate, Japan

### **Abstract**

Recently, PET examination has become common. We have reported the usefulness of using  $^{18}\text{F}$ FDG-PET examination for head and neck cancer. In 2007, we performed PET-CT examination which can investigate whole body. In the present study, we reported the outline of it.

In 2007, we performed PET-CT examination for 14 patients. One of these, we suspected metastasis for abdomen after primary therapy. In this patient, there was a sign of integration of  $^{18}\text{F}$ FDG in right abdomen in whole scan PET image. Later, we performed CT examination for abdomen. Then, it turned out cyst of kidney.

The distant metastasis is a great influence on prognosis in cancer. By using PET-CT examination which can investigate whole body, we can investigate not only metastasis for local lymph nodes or recurrence in primary lesion but also metastasis for distant organs. Therefore, PET-CT examination contribute to improve prognosis of patients who has head and neck cancer.